

トライアスロンイン上五島2018 レポート

大阪府 坂口晃一

昨年、頸椎手術後の復帰戦としてリレーの部（バイク担当）で出場し、メンバーにも恵まれて優勝することができた。その頃は術後の経過も良好で、調子も上がってきていた。なので「来年はレギュラーの部でも走れるだろう」…そう思っていた。しかし、仕事がどんどん多忙となったために練習時間が激減。さらに膝から下を中心とした脚の違和感も大きくなり、練習自体もままならなくなってしまっていた。そのため、今年も浅上先生にお願いしてスイムとランのメンバーを選んでもらい、僕はバイク担当としてリレーの部に出場することとなった。

ラン担当は、昨年も一緒にチームで走った地元新上五島町の山下君だ。参加選手の中でも1、2を争う走力の持ち主である。そしてスイム担当は、元トップ選手で現在は後進の育成に活躍している千葉ちはるさんだ。これで燃えないわけがない！…というところだったが、正直言って調子は下り坂気味である。昨年の今頃は十三峠（毎週練習で上る峠で、平均斜度約10%約4km）で20分を切る勢いだったが、最近は22分すら切れていない。さらに今年は、来年の第30回記念大会に備えてコースが一部変更されており、バイクコースは上りを走る距離が長くなっていた。奇妙なプレッシャーが微妙なバランスでのしかかってきていたのだが、気にしたところで調子が戻るはずもない。とにかく気負わず、自分のペースを走りながらつかむことを優先することに決めた。

午前9時…この大会独特の、のんびりした雰囲気からスイムがスタートした。今回は例年の高井旅ビーチから奈良尾漁港に変更となり、栈橋から海に入って待機するフローティングスタートとなっていた。ここでスタートの号砲が鳴っても栈橋から海に入っていない選手が若干名いたのもご愛嬌…ほとんど波のない湾内を選手が泳ぎだしていく。さすがに高井旅のような透明度はないが、プールのように泳ぎやすそうだ。

湾内を3周回して、トップの選手が後続を大きく引き離してスイムフィニッシュしてきた。声援を送りながら、リレーエリアでスイム担当である千葉さんのフィニッシュを、昨年とは少し違った緊張感で待つ。千葉さんは現役時代、スイムに定評のある選手ただだけに、上位でフィニッシュしてくるだろう。下手な走りはできない。

スタートから40分経過しないうちに、千葉さんがフィニッシュしてきた。同じく別のチームで参加している旦那さん（千葉智雄君）に次ぐリレーの部2位である。

「普通に走れば優勝できるかな…」

そんな思いが頭の中をよぎったせいか、少し肩の力を抜いてスタートすることができた。スタート直後から緩やかに続く上りを、徐々にペースを上げながら走る。しっかりウォーミングアップしたおかげで、踏み込み時の痙攣も起こる心配はなかった。思ったよりも良

い感じで一つ目のピークである鍋倉峠をクリアし、しばらく下った勢いで白魚峠を上る。比較的緩斜面なので、下ってきた勢いを殺さないようにするのがポイントだ。ピークに続くヘアピンを左へ曲がると、勾配が少しきつくなる。エイドステーションで声援を送ってくれる高校生たちを見ると、ペダルを踏み込む脚にも力が入った。そして程なく、リレーの部1位の選手にも追いついた。

「意外と調子は戻ってるのかも？」

そう感じる一方で、前の選手を追うでもなく、後続の選手から逃げるでもない…中途半端な状態のエアポケットに、いつの間にか陥ってしまっていたようだった。

海岸線の細かなアップダウン区間をクリアし、いよいよ最大の難所である米山へ向かう。踏み込み時の痙攣も起きず、脚が軽いとはいかないまでも思っていたよりは順調に上がることができていた。油断すると時速10kmを割ってしまいそうになる急勾配の箇所も無事にクリアし、あとは下り基調になると思ったそのときだった。後方から追いつけてくる気配を感じる。ふと視線を移すとヘアピン越しに選手の姿がはっきりと確認できた。

「スイムで遅れたレギュラーの部の選手か？」

しかし、そうでないことはすぐにわかった。瞬く間に追いき、ついていく間もなく抜き去っていったのはリレーの部の選手だった。典型的なクライマーの走りである。たとえ現在の調子が絶好調だったとしても、彼についていくことは無理だ。その分だけ諦めがついたので、そのままの調子で残りの上り区間をクリアする。

しかし、下りの途中で五島市の樋口君に追い抜かれたときは別だった。彼は今回久々の参加であるが、数年前は年代別表彰を争っていたのである。現在の實力は遠く及ばない。それはわかっているつもりだったが、ここで眠っていた闘志に少しだけ火がついた。長い下りで少しずつ距離を縮め、視界から外さないように走る。これまでとは違い、目の前に目標となる選手がいると脚にもより一層の力が入るものだ。再び追いつくことは叶わなかったが、確実にギアをひとつ上げることができた。

今回のコースは、以前は1回だけだった鍋倉峠を2回上る。地味にだが、これがだんだんと脚に効いていく。1周目とは明らかにスピードが違う上に、樋口君の背中も小さくなっていった。また一人旅が始まったが、白魚峠を過ぎて海岸線のアップダウン区間を走る頃には周回遅れの選手が見られはじめた。

そして2回目の米山に臨む。1回目とは明らかに脚の重さが違う。必死に上りながら、この先の展開をふと考えた。順位としては現在2位である。ただ、早い段階でかわされてしまったため、かなりの差が開いていると考えるべきだろう。もうあとは山下君に託すしかないのだが、相手チームのラン担当選手がある程度の実力者であれば、逆転も難しい。

何とか米山をクリアし、バイクフィニッシュへ向かう。港から奈良尾大橋に向かう途中で、1位チームのラン担当選手が走ってくるのが見えた。1km過ぎといったところだろ

うか。バトンタッチする頃には2 kmの差がついていることが予想された。

奈良尾大橋上での向かい風に耐え、下った先がバイクフィニッシュだ。バイクをラックにかけ、リレーエリアで待つ山下君の元へと走る。

「ごめ〜ん、だいぶ離された！」

去年はトップで引き継いだだけに、今年の自分には、あまりに力がないことを思い知らされた。それでも逆転を信じて託すしかないのである。バトン代わりに計測用アンクルバンドを巻き終えた山下君は颯爽とスタートして行った。

今回のランコースは、一旦トランジットエリアまで帰ってきて折り返し、港まで行ってから帰ってくるという形に変更されている。つまり、行って帰ってくるだけのコースだった去年とは違い、トランジットエリアにいれば途中経過がわかるのである。

1位の選手が帰ってくる。ここから山下君が帰ってくるまでの時間を計ってみると…ちょうど2分である。

「2分差！いけるよ！」

少々無責任だったかもしれないが、山下君の走りを見て思わず叫んでしまった。他力本願になってしまったが、ここはもう期待一杯である。

フィニッシュ近くの沿道で待っていると、応援に来ている山下君のお母さんと奥さんに出会った。

「どうですかね〜？」

「いけそうですよ！」

そして、もうそろそろ…と思って待っていたら、千葉さんが走ってきた。

「もう来るよ！トップで！」

そしてすぐに山下君が帰ってきた。もう十分に引き離して余裕があるはずなのだが…3人一緒にフィニッシュができるのか心配になるくらいの全力疾走である。もちろん千葉さんは大丈夫だが、僕のほうが心配だったのは言うまでもなかった。幸い脚の痙攣も起こらず、無事3人一緒にフィニッシュ。なんと9分差をひっくり返す大逆転だった。

今回、リレーの部は去年の5チームから、3倍近くの14チームがエントリーしていた。来年はもっと厳しくなることが予想される。来年こそはレギュラーの部で出場したいところだが、体の調子によってはまたリレーとなるかもしれない。いずれにしても、今回は僕自身としては不本意な走りとなってしまったので、30回記念大会となる来年はしっかりと準備をして臨みたいところである。

